詞乃やちまた　下

ホ 2
5597
2

ホ2
369

詞八衢下卷

多行之圖 并受るてにをはの図

	四段の活 打ウツ 待マツ	中二段活 落オツル 閉トヅル	下二段活 捨スツル 撫ナヅル
一	(た) ぞ で じ ぬ ん まし	(ち) ぞ で じ ぬ ん まし	(て) ぞ で じ ぬ ん まし
二	(ち) て つ た き けん なば つる ぬる し ちり		
三	(つ) めり らん べき らし と とも	(つ) めり らん べき らし と とも	(つ) めり らん べき らし と とも
四	かな まで に を より	(る)チ かな まで に を より	(る)チ かな まで に を より
五	(て) ぞ ば ども	(れ) ぞ ば ども	(れ) ぞ ば ども

中二段活・下二段活の二：(ち)(て) て つ た き けん なば つる ぬる し ちり

○此行には一段の活用なし

5597 2

四段の活詞

はのつ　はやまつ　うつ　うがつ
かつ　かこつ　ふごつ　けつ
こぼつ　まぶつ　そぼつ　たつ 立
たつ 断　たもつ　たなつ　○もつ
もぐつ　もとかごつ　まつ　まつかごつ
○こつ　もつ　ひかつ

○もつ 古今集夏にわの哀れ氏もつとかへらん 六帖五の袖もぢつでた 後撰集恋の五つそぞのそぞもつ 金葉集春に池のひかれ松の云くなどありけて此詞ハ此行の中二段みち活きて

おれしらなめ氏伴なおれられかまつはり
○みつ 古今集の秋ふるぞ入ぬるいその 後撰集に秋みぬあまきけなや 拾遺集恋の秋ふるるかどれわかにぞつ添ふ後拾遺集冬に飽きつるにうもにの経藤原君の巻に孫かびみなしやうと云く又吹上巻の秋ふるんとて云く又同巻の寄の志なのうつかれ 源氏物語真木柱のむねみちつうちしてゐく 丹後守為忠家百首に盛忠いかなれバうるおくひかた自影の云くなど拾いおほしけてかく多く出せるハ此詞井二段の うち うつ うつる うつれとも はみうく如く思ふに忠の活きたる一ツもなくあるべくこれ此活き

又いへれどもなかり又寛平女御入内屏風にはまへとあはして
うゑてあるたのもしげなくみちてかひなきよの影で
見えたるとあはせつるハえたるをてふを取りいはゆる自
他のはたらきよくわきまへがたし

中二段の活詞

此類をも俗言にておちるといふ例なり

○いきつる　おつる　おぢる 懼　さつる

○志ひづる　そふづる　とづる　をづる

○あつる　○とみづる　よづる　○きつる

○いさつる　古事記上巻に啼伊佐知伎(ナキイサチキ)云々又下に哭伊佐知流(ナキイサチル)

此ありつをいきつるといふ詞は俗なれハ然あせりちるとい
ひそハ俗言の例なり　続日本紀宣命に荒備流(アラビル)とあるも俗
言此例ありこの外かくいへる例なし

○志ひづる　日本紀孝徳巻に譖(シコヅ)倉山田大臣於皇太子曰云々　続
日本紀宣命に讒(シコヅ)治まをしたるに云々　字鏡に譖ハ讒也
志已豆(シコヅ)とありはてかくちづとのみ見て外の活きなく
ども詞のさまをこれ活なあり四段のはたらきにて濁音一ツ
も取く此活にハ濁音のこと多くわれぞなり

○そふづる　堀河百首雑に袂そぼちぬ　拾遺集恋にそぼづる

○さへける　拾遺集恋にはとしかのはちうにひちぬ山川の頃集

又をりしもこぼらうちまでひづる袂の急　蜻蛉日記に袖ひづる時を
だにこそなげきしか　源氏総角にかく袖ひづるなど　堀河二
郎に袖ぬらしつるも此詞にかよひて活きて同じことなり
○もみづる　万葉十に山の将黄変(モミヂム)　古今集にはもみぢもみぢぬ松
もなくまれ　新古今にはよもからし此枕にもみぢでなど例あり
○をゝる　出雲國造神賀詞に弥乎知(イヤヲチ)爾御袁知(ミヲチ)坐(ミヽ)云々　万葉
集十七にしきなれ乎知(ヲチ)母(モ)かへりき同廿にゆゑ花ちるない
や乎知(ヲチ)にさけ可と後の哥に郭公にをちかくりなかいくるを
これなりはてかくみことありてつ　つる　つれとはまるとなえあ
たらざれども此活に従べし

下二段の活詞

此ゆるを俗言にてゝるといふ例なり

あぐる　○あわつる　いだる　○うゑる(棄)
かなづる　くそぶる　まつる　そぶる
たつる　なづる　云いづる　へづる
まうづる　○ゆだる

○あわつる　字鏡に惶急阿和豆(アワツ)とあり　あわてといへるは误し
○うだる　古事記上巻にぬなぎ宇豆(ウデ)又棄をうつるとよめる後
○ゆづる　字鏡に煠ハ以菜ヲ入湯ニ云々奈由豆(ナユツ)とあり　又菜花於經
本集巻に法見よとてゆでさせなひてとなど例あり
○古事記上巻にゐひかえで　又古今集春に白雲のこのかき

ふかん所やぱてよし　土佐日記にもとぴてくさむけも
しらぬ又かつら川袖をぬてもらく　夫木集に那ら川のなに
校ぴてく　此外みてくなどいくるしてハしづくせ　那すを
那らく　ゐてハ　ゐかし　みてハ　みゝせを知ゑていくるの
ふにてつ　つる　つれなど活ちはれぞこれをすべて詞にハ
はくぐぶ所りけとを上にもいへるこのうちみてハ必活にカ
手にうゑうつるたのもみさなくうくなどうつるともなれバ
こ此活詞ともおもふまでど行起にあしらがはべし

奈行之圖

並受るてにをはの図

變格の活 往(イヌル) 死(シヌル)	一段の活 似(ニル) 煮(ニル)	下二段活 兼(カヌル) 束(ツカヌル)
な　ず で じ ぬ ん まし	に　ず で じ ぬ ん まし	ね　ず で じ ぬ ん まし
に　て り けん つる し　て き なば ぬる しり	て り けん つる し　て き なば ぬる しり	て り けん つる し　て き なば ぬる しり
ぬ　めり らん べき らし と とも	にる　めり らん べき らし と とも	ぬ　めり らん べき らし と とも
ぬる　かな まで に を より	かな まで に を より	ぬる(ネ)　かな まで に を より
ぬれ 祢　ぞ や ど ども	にれ　ぞ や ど ども	ぬれ　ぞ や ど どれ

○此行にも四段の活中二段の活なし

○変格の活詞ハ図の上に記せる往（イヌル）死（シヌル）の詞二ッのミなり活ざまハ大抵四段の活ざまにて切るゝとつゞくとハ詞二ッにわかれたるその結び二ッあり下知の詞ハ祢といふかさし

一段の活詞

似 にる　煮 にる

下二段の活詞

此ぬるを俗言にハ祢るといふ例なり

かぬる　かさぬる　○かゝぬる

○たくぬる　たばぬる　はかぬる　○はぬる

はらぬる　ぬる　○ちぬる　○ふさぬる

○ゆづぬる　○ひがぬる

○かさぬる 万葉十八にかしこきみちの許登可多祢（カタネ）もちとあり

○たがぬる 万葉五にたつのはなえしに多何祢提（タガネテ）とよめり

○たくぬる 万葉十五にきこえのゆくゑみちなかがねまとこそ多多祢（タダネ）云くといへり

○むかぬる 蜻蛉日記にあのおもひきはかねなどして云ことあり

○ちぬる 古事記下巻に須岐婆奴流母能（スキパヌルモノ）まこと万葉集二に奥津かいたくな波祢（パネ）そ邊津かいいたくなはねそとあり

○ふさぬる 日本紀用明巻に總攝（フサネ）万機をよろづのまつり

思ひごとをふさぬかなりてとゝのへたり　続日本紀宣命又萬
政摂以をよ語づのてもつゆてを字ふさぬをもちて必ゝのへたり
散木寄歌集釈教の哥にもし書又大かたふさねてかの
ゑへ明るこゝろなどあり
○ゆふぬる　日本紀に付をゆふぬとよめり
○わかぬる　大和物語にかいわかねて法くみけり　又枕草紙に
わかねてみらん云ゝなどいへり

波行之圖　並受るてにをはの図

	四段の活	一段の活	中二段ノ活	下二段ノ活
	逢アフ 問トフ	干ヒル 嚏ヒル	戀コフル 侘ワブル	加クハフル 辨ワキマフル
一	(は) ぞ で じ ぬ ん まし	(ひ) ぞ で じ ぬ ん まし て き なべ ぬる けん つる し たり	(ひ) ぞ で じ ぬ ん まし て き なば ぬる けん つる し たり	(へ) ぞ で じ ぬ ん まし て き なば ぬる けん つる し たり
二	(ひ) て き なべ ぬる けん つる し たり			
三	(ふ) めり らん べき らし と とも	(ひる) めり らん べき らし と とも	(ふ) めり らん べき らし と とも	(ふ) めり らん べき らし と とも
四	かな まで に を より	かな まで に を より	(ふる)ヒ かな まで に を より	(ふる)ヘ かな まで に を より
五	(へ) ぞ や ども	(ひれ) ぞ や ども	(ふれ) ぞ や ども	(ふれ) ぞ や ども

四段の活詞

あふ
○あがふ
あきなふ
○あぢはふ

あげつらふ
あざわらふ
あそぶ
○あつかふ

○あとらふ
あとのふ
○あどもふ
○あななふ

あへしらふ
○あまなふ
あらふ
あらがふ

あらそふ
いふ
いこふ
○いざのふ

○いさかふ
いざなふ
○いざよふ
いとふ

いはふ
いろふ
うかぶ
うかがふ

○うけふ
うしなふ
うたふ
うたがふ

○うづなふ
うつらふ
うばふ
○うるふ

うべなふ
うやまふ
えらぶ
おふ

おふ
おこなふ
おそふ
おとなふ

おもふ
おゝまふ
およぶ
かふ

かふ
○かゞふ
かゝづらふ
かゝよふ

○かくらふ
○かぞふ
かゝらふ
○かゞふ

かつふ
かよふ
きそふ
きほふ

きらふ
きらふ
くふ
くらふ

○くるふ
こふ
○ころぶ
さかふ

さけぶ
○さすらふ
さそふ
さもらふ

さぶらふ
○さらがふ
○しづまふ
しなふ

しづのふ　しならふ　○しなふ　しぬぶ
○しらがふ　すふ　すゝふ　すまふ
すさまふ　そふ　そこなふ　そろふ
○たぶ　たがふ　たぐふ　○たゝかふ
たかふ　たぐのふ　たまふ　たぐらふ
たゆふ　たらふ　ちのふ　ちがふ
ちわぶふ　はかふ　はのぶ　はきまよふ
はく朋ふ　はこらふ　○はこふ　はゞふ
はこなふ　○てらふ　いふ　いぶ
いらふ　いさのふ　いそなふ　○なるずらふ

なげきふ　なまふ　ならぶ　りきはふ
りなふ　りかふ　○りよふ　ぬふ
ゑがふ　○ゑまらふ　ゑらふ　のぞふ
のこまふ　○のろふ　そふ　ちからふ
ちゝぶ　ちぢろふ　ちらふ　ちらぞふ
ひとづらふ　ひろふ　ふまふ　○ふれだふ
○ふるまふ　ふるまふ　へつらふ　まふ
まがふ　まかなふ　まじ朋ふ　まじらふ
まつらふ　まどふ　まどふ　まねのぶ
まどひまふ　まよふ　まどふ　○こゝろなふ

むかふ　むさぶ　むせぶ　○もとよふ
○もとふ　○もらふ　やしなふ　やはらふ
○やとふ　やらふ　ゆふ　○ゆるぶ
よぶ　よそふ　よぼふ　○よろふ
よろこぶ　○よろぼふ　わづらふ　わらふ
ゐやまふ　ゑふ
○あがふ　万葉集十七に安賀布(アガフ)いのちも　字鏡に安賀布(アガフ)
などもあり
○あぎとふ　古事記中巻に始為阿藝登比(ハジメテアギトヒシタマヒキ)　蜻蛉日記に
あ肌かまへとたゞてそかきおもてをそらさん人のあぎとふ

やくにもれど云くなどあり
○あなふ　日本紀神代巻にあなふぬかもふとあり
○あたなふ　日本紀神代巻に奸賊(アタナフ)とあり
○あともふ　万葉二に御軍平安騰毛比賜(アトモヒ)　又九に阿騰母比(アトモヒ)
とくなど稱あり
○あなゝふ　続日本紀宣命に阿奈奈比奉(アナナヒ)とあり
○あまなふ　日本紀仁徳巻舒明巻に不和をなまなくし
よそれの又應神巻に欲和をあまなへんたまへんとよとよみあか
とてよ此行下二段の活も格なり
○いごのふ　古事記中巻にええしやこしや八伊碁能布(イゴノフ)ぞ

とあり
○いさかふ 大和物語にいさかひかゝりけり 落窪にもいさかひけり
いさかひてなどあり
○うけふ 古事記上巻に宇気布(ウケフ)とあれ 伊勢物語にはこ
まなき人をとうけへてなどあり
○うづなふ 万葉十八に神あひ宇豆奈比(ウヅナヒ) 続日本紀宣命
に相宇豆奈比(ウヅナヒ)奉などもあり
○うらふ 拾遺集にうらぴよりねと 丹後守為忠家百首に
忠盛にまつの衣のうらぴぬるかなとあり
○かゞふ 万葉九に加賀布(カガフ)嬥歌(カガヒ)とかけり

○かこふ 金葉集雑にかこふ垣穂の 好忠集にかこひそめぬと 道
のまがき 堀河百首雑にかこひなき紫の庵 丹後守為忠
家百首に仲正かこひてさけるかきつはたなどもあり
○かそふ 古事記中巻掠取其母王(カソヒトリテツノハハノミコヲモ) 続日本紀宣命に当御
座ノ次乎加蘇毘(カソヒ)奪まつる皇位乎掠 天なとあり又日本紀継体巻
に捉をかそひとよめり
○かゞふ 万葉十八にもと加多波牟(カタハム)かも 後撰集春に山風の
花の香かゞふふもとのさとにてなどあり
○くるふ 万葉四に久流比(クルヒ)に久流比(クルヒ)おもひかゆるうちもとよめり
○ころぶ 日本紀神代巻に発稜威之嘖譲(コロヒ)ニ 又神武紀に詰嘖之(タケビコロビテ)

又万葉十一にもゝに所嘖(コロバエ)物思ふわれを又十四に紐とくてぬる君に
はゝに許呂波要(コロバエ)なども紛りはて此詞中二段の活らとおもはるれど
ふまづしきもへしてきにて其言中二段の活詞の其第一の音
より良行の下二段の活にころがれあらいふ例なしかくふ
ころな四段の活よりあれば前のころがえ八ころがれなる
○さぼらふ　大殿詞に佐須良比(サスラヒ)うしなひてん　源氏物かたり
総角にあるまじきさまにさすらふたぐひ　金葉集恋部
ゆくへさすらひて物がありせ此詞もの行の下二段の活にもいひて
おもしきことまとへしたり
○さらがふ　源氏明石にあらそひさらがひ　散木寄歌集に

山陰にやせはておくるいぬさらおもひをなされてひく人もあ
○志ぶまふ　古事記下巻に匍匐(ハヒ)進赴(シジマヒテ)云く続日本紀宣命に
進退(シジマヒ)ちらくひなどあり
○志なぶ　万葉三にもみぢ葉の散之奈布(シナフ)せの山まと十三に春山
乃四名比(シナヒ)ちえて又二十にもみち之奈布(シナフ)きみがかうどゝ又
好忠集に尾羽ぞしなぶるなど見ゆあり又也行の下二段の
活に志なゆ　志なゆる　志なゆれ　志なえといふ詞あり　これ
これ此詞と今八同じ意ときこゆれどかく行も活も異にて同
じきみなる例なければ異なることのあるものやらざとも
うしはらくのこなり

○しらがふハ 源氏竹川巻にしらしらしかひまじく総角巻にしらしらしかふなどあり

○たぶ 続日本紀宣命に多婆受とあり又後にたうびたうぶなどいへるハたびたぶを音便にいへるなり

○たくはふ 万葉十九に多久波比おきてとありさて外の法きこゆるものなけれバ中二段の法をもしかと定めがたけれどこの詞をもまたまのはたに似たれバ先こゝにのせたり又おもふに此詞を今用ふる下二段の法とおもひてはきこゆるもありたくはへといふべきを第二の音にうつして右のごとくいへるにてたくはへを たくはひ はぶへを はぶひ うきへを うきひ

おしなべを おしなみと なぞいへる此例なり なほこの中二段の法のうちにもとゞまるといふ詞のところにいへる事あり考へあはすべし あらそひ さそひ おしなみ なぞこれまれにあることなるをまで此外四段の法をはぶきていへる例なし

○流らふ 公忠集にながらへるよしのとあり

○てらふ 日本紀歌に山のへにこしまよ人涅羅賦をみれやつげハもとしらくもなし文字鏡にてらはずともあり

○なぞらふ 後撰集春になぞらふる 源氏きりつぼの巻になずらふ人せちにありなむや又なずらへてふかなづらふぎらん又行幸になずらひてもなくぬへぎるハなどおほみさく

かく心得て読まては他のうたのこゝろはなほざりかとおもひとりの
行下二段に なほざらふ なほざらふる なほざらふれ なほざらく
とあるはいきてこそ他のもれにこれをなほざらにおもひとるとよを
こゝろ得るりかなにかくおもし行なかし詞のこゝろになるるなく
自他をわかつことはいと多かれどこといはさくのまぎらはしげ
なれば諸りでにわきまへおくなり
○にほふ 落窪に にほひある所あり
○弥ざらふ 日本紀雄畧巻に勞(ネギラフ)軍(ツ)とあり
○のろふ 霊異記に咒をのろふ 伊勢物語にあまの比ゆてのろち
てなきの詞ぴある所る 枕草紙よるき思ふ人をのろぴ

まがまがしくなど見えたり
○ふれぶふ 源氏初音にふまゝびぬべきことあるしやあるとも又
夫木集又西行法師 あづかりきねにふれぶびて何どあかつく
此詞を用り 万葉二になかれ ふらぶくとあるをふれを延へ 縮
てり見るも有
○ふるふ 舊事記にゆらゆらに布瑠部(フルベ)とあり
○みそなはふ 新古今集に神もあはれとみそなはすらむ
用ひなおあり
○もこよふ 古事記上巻に委蛇(モコヨヒ)文日本紀お用ゐし 源氏葵
にさゝふよはふまくこく ら愛を構ふ見よふげてふれたまふひ

はへりけるなどあり

○まとふ　日本紀神武巻哥にかむかぜのいせのいはひ茂登倍屡云

古事記にはもとほりとありすべて第四の音よりはたらける辞を

受るやうの此はたらきの格なり

○もらふ　字鏡に餬寄食也毛良比波死とよみたり

○やとふ　続日本紀長歌にふみもるゝ博士不雇須とあり

○ゆるぶ　源氏紅葉賀に心ゆるびなきとあり

○よろふ　万葉一に取与呂布とあり

○よろばふ　源氏夕顔にうちよろぼひとあり

○たく　なぎさをと　なげらひ　はぐゝ　まさし

をまもらひ　さこしらへを　まとをまとひ

あゆみを　あゆひ　ぬきてをぬきてもむ　かゝへるを

かゝふ　のきを　のらくなど延ていへるもあまたなど多

しその中に此四段に活きたるものにのみかぎりて

ありける又たゞ某詞をのべしほのなとにて活かぬはすれる

もあるし　又二重にのべていへるもあり古事記中巻に

はひもとほろふ　ちぎみのかくとあるハもとほるをもとほる

といひ又それをのべてかくいひ日本紀雄略巻に中つ枝に

おちふらばへ又万葉二に下つ瀬になかれふらばへなとあ

はちふれをふらへをのべ又それをふらばへといへるなり

此類も猶あるなるべけれバ考ふべし

一段の活詞

ひる 干　○ひる 噴

○ひる 和名鈔に嚏 和名波奈比流(ハナヒル)噴嚏也 古今集にちかなて

ひぬの肌ちかどなるにありけるを鼻(ヒル)ひるものにほえくかれとも噴と

かなのし訓なるべし

中二段の活詞

此ぶるを俗言にはひるといふ例なり

○あらぶる　あらぶる　○いなぶる　○うゆぶる

○うれぶる　おぶる　おとなぶる

○おらぶる　かぶる　くしぶる

こぶる　○こぶる　ととのぶる　はぶる

○さぶる 強　○さぶる　○さのぶる　○きさぶる

○たかぶる　○ともしぶる　○みやぶる　○ねぶる

のぶる　かゝらぶる　○ちかぶる　からぶる

○まなぶる　○むつぶる　もちぶる　ほぶる

ほりぶる　○みやぶる　をさなぶる

○右に挙たる外何ぶるといふも引あるべし

○阿からぶる 出雲國造神賀詞に赤玉御阿加良毘(アカラビ)坐とあ

但此詞麻行にてハ四段の活なれども此行よりうつりてハらく
に活きとなることもあり此類なるはこれのみあり
○いなぶる　源氏末摘花にいなびぬ心にて　又若菜にかく
いなぶるを　又総角にえきこえいなびでなど格あり
○うやぶる　祝詞に蹠夫留（ウトブル）また蹠備（ウトビ）などありこれも麻行
にてハ四段の活なり
○うれふる　三代実録に憂比礼（ウレヒ）ともありて此詞をつねりこの
行の下二段の活に用ひたるを右の如くあるは四段の活也
格ありけれど此外に活きたるをみえず されバ何までとかくいひた
しかるは宮なかにもれど四段の活なるバうまでなん　うれたぬ
うれたし などいふに宮まゐりなる事はえいふべくもあらねバ
うれたきまでそ うれたびん うれたびぬ うれたびじ といふ格あり
かくていふべきはずなれども又いひなせる所あり 但し同じさまに又
下二に活く詞の例四段の活と中二段の活 又四段の活と下
二段の活などにハこれかれあれど中二段と下二段とに活きて同し
さまなるハ例なし なほ此行四段の活詞のたぐひなるといふ下に
いへるを併せみるべきなる活し
○おらぶる　万葉九にさけび於良妣（オラビ）　日本紀崇神巻に咊哭（オラビナク）又
雄略巻に呼嗁（ヨバビオラビテ）などあるのみにて外に活きたれども四段の活らとも
おもへど猶この活のかたなるべし

○こぶる　字鏡に媚ハ古夫　霊異記に媚ハこびとあり　古事
記上巻に媚附云々とあり此外に活きたることハ見えざれども
こは活用ときこえたり漢籍読にこびんとよめるも
らきほかにしてあり
○しふる　万葉三にいなといへど強流志斐能我強語云々又
六帖四に人をもしひじしなどあり
○しふる　和名鈔に聾和名美々之比又盲和名米之比　古事
記などにもあれどこれも外に活きたるを見ざれども此活用なるべし
○しのぶる　源氏箒木にたづねまどはさむともかくれしのびて
云々若紫にしのびさせたまへるに云々浮舟にしのびさせたまふ
まじきことをまねびて云々　栄花物語にこれかれの思ひに
しのびさせたまふなどありさせといふ詞を男二の言より受
るさま井二段の活にかはれり此しのぶる　しのぶれといふハ
落に多し又万葉十一に不竊隠をたまき点にしのびずて
とよめり此詞四段にも活きてきこゆるハ全くおなじ
○すさぶる　源氏朝貞にのたまひすさぶるなどあり此詞も 麻
行にて八四段の活詞なれば此行にうつりて八ら行の此活とせり
○たけぶる　古事記上巻に建而 訓建云多祁夫　万葉集十一にもおも
ひ多鶏備てなどあり又日本紀雄略巻に叱をたけびしえん又
さけびしえんとも訓点あれ此外に活きたることをおのに見えざれば

四段の活りこれをもて其の定めなかりしされど先志らべつくして
にあしおきつ文字にうつしえて志るしといふ辞(テニヲハ)を第一の言より
受るを四段の活の格第二の言よりうくるまでこれ格なれバ
たけぞしれむと第一の言より志るしといひて八れて四段の活
詞らけびしめと第二の言よりあげ記て八ることれ活詞なりかく
二タやうによみされまた四段にも中二段にも活く詞にや
○かくもちぶる 万葉十七にあともの母名のこゝろきゝて登母之夫流(トモシブル)
かねとなりこゝまで 麻 行にて四段の活詞なり
○にぎぶる 万葉一に柔備(ニギビ)にしと云ことあり此詞も外にはなく
ばまでどもこれ活にわたすべし

○旅ぶる 物語書に旅びとの心ばどあるをいふ此詞も
かくれたるあれて外にはみえきこえざるなれどもこれ活
詞とききこえぬ素
○おかぶる 伊勢物語にかきつけたることなどおもして
おかびりのみめとあり此(コン)活ざるなめ俗云にもおかどびるといへり
○まめなぶる 千載集序に此哥此そこまでまめなぶることなきさ
くに云ことなりて文下にふるこれ女子まめなびとびといふ
乃活きまえ此詞四段の活りのこと用ひてかくいへる外にみえあ
らぬ文字をさ所にしてもきこえいふ
○むつぶる 六帖三に淀をもつぶるなるこれ云く 源氏蓬生に

例をはしらむおびめを　又夕良又さらはしくおひむつぶる

まてちぢ並などもあり

○かゞぶる　續日本紀宣命に爲夜備末都利　日本紀繼體巻に礼」賢まして跪礼などありけて又日本紀孝照巻に礼」神ゝく

第三のまるよあり下へはづけてよめるを四段の活の格となされど此詞のさまは四段の活詞の如くにはあらざれば此活詞のさまにおもはるれどこゝにおけり別によく考ふべし

○うれしび　かなしび　くやしび　たふとび　よろこびなどあるも麻行なれどて四段のはたらき詞なれども此行よりかよひてこゝに活き別るべし

下二段の活詞

此ふるを俗にふへるといふ例なり

○あふる　あぢまふる　あへふる　あげつらふる

○あつらふる　いらふる　○うれふる　○おくまふる

おさふる　おとろふる　かふる　○かゝふる

かぞふる　かゞまふる　かまふる　○かくまふる

かむかふる　くぶる　くはふる　くらぶる

○こしらふる　こたふる　さふる　さゝふる

さもらふる　○ちゞまふる　ちゝぶる　○すぶる

そふる　そなふる　○たふる　たがふる

○たぐふる　たくはふる　たゝふる　たづさふる

たゞふる　たけふる　ちがふる　はりふる
はらふる　はどふる　いさゝのふる　いさなのふる
いらふる　○あぶる　ながらふる　なぞらふる
なぞふる　ならぶる　のぶれ　○そふる
○そばふる　○ひりふる　ふりふる　ふそぶる
かゝぶる　まがふる　まじふる　よそふる
こゝろりふる　あふる
○いふる　蜻蛉日記にかゝくものがめぶるハあふれどもあらず
はりゆぬとちてそゝまに文ことばかきなぶべくあらじ
源氏葵に心えきちあふまじく　真木柱に人の見あふる

ちなみなり　浮舟にはづかしあふまじくおもほえむ　狭衣三にくめも
えならぬみあふまじく於葉花物語にもあり又詔詞解に
敢末之時止為（ヨ）をあふまじきとしてとよまれたりすべてましの
てにをはを切るゝ詞よめ受る例と依てあへとは甚に多くいへり
○あよみなふる　日本紀應神巻に欲和をあはなへむとし
よみたりこれ活きて取り又仁徳巻に不和をあまなはずと
よめるまゝ四段の活きをもよめり
○うらふる　古事記上巻にうらまれて卜相（ウラヘテ）而とありうらふ
うらふる　うらふれなどいふるとは見くずれどもかく活く例の稀に
○おくまふる　萬葉十一に奥間（オクマ）経（ヘテ）而とかくまふといふあり

外にもかくざれども此活の例あり
○かゞふる　竹取物語にかゞくなり　蜻蛉日記にやうそのかく
かゞくてまのしぬ　栄花物語楚王夢の巻になくくかゞくまつ
らせあへめなどのことありてかゞふかゞるかゞふれといへるみえあ
たらざれどもかく活く例あり又[也]行下二段の活きそかゞ
かゞめるかゞめれかゞえといふ詞ともおもへどもすべておほよそ
ほる八おほかたこれ此活詞にいひもおのづからはなるゝ八[也]行
の方にいくべき格こその活詞なるべし
○かまふる　栄花物語月宴におほしかまふと云く又かまふる
都とにて云くなど源氏におほかし

○こゝらふる　日本紀に愚喩（コヽシラフル）とあり又こゝしらへといへる八物語書
におほしこれも[也]行にてあらざるべし
○しつがふる　竹取物語に心にもしつがへずとあり
○しぶる　古今集に又これぞ流るゝ此のはちすを葉有
玉ゆりすぶる水のほとしきとよめりまたすべといへる八共の心ち
○たふる　源氏物語相壷に又えゝふまなしとありたへと八老におもし
○たゞふる　敦忠集にわがためしてぶる水をと云くたゞへとい
へるも共のくふ則り
○なぶる　蜻蛉日記にはかなにやけてしかぐく後ここひ八お
しなぶるなめりこれもなべといへるをおほし　又うちかほ物

続万葉宴 寿にうるはしくをかしき花のなかに云ことあるを
なぶるちより此行と麻行とかよふ八其のことなれバちるゆるとか
けるのこゝろにて麻行の下二段の活のよしあしかるべし
○ちりふる 万葉十八にちりし波布流ろうしなく八云こ 新古今集
ふるあちぷるまでとよりこれいちくといふぞつねなり
○ちらふる 万葉十七に中臣のふとのりごとといひ波良倍 伊勢
物語にちらくぺるまにに 六帖にちらふるをも又ちらふれバ又糸
流あてちらくんと云こ 後撰集又友をらぷける 拾遺集
にちるふるをも 同哀傷にふちえちらぺてける 後拾遺
集雑又はらぺける外 兼盛集又河風をちらふるをもなど拾

遺にしも此詞をかくおかくおほせる八ふるく八波もたく四
段の活又のこ用ひけるを弁すよ共波又かぎりて四段の活又い
まだ見えこ此活にのこしひていへる今此しおひあれおぼつかなり
○ちりふる 古今集秋詞書に紅葉のちる木のもとに馬をひきへ
てとありけり外又もかく此こありて外又活きたるをとみえず
まべ也行の下二段の活ともも思へどなほちらにちあらじこの
よしかゝふるのこゝろにいくるかごとし
○万葉二十にちはやぶる神をもむけ麻都呂倍奴人をもやハ
し云くとあるハこの活ぎすあけれど此詞此行四段の活きに
みえもちひてこの活又いくる八外又倍なく又かく活く詞のき

まともえくざれぞこれ活詞の妙なることをさとるべし

○万葉十五にまつひハあさてゆふべに多麻布禮杼(タマフレド) 挟衣

ふきぬのきそをおもへくふすまくほく 挊草紙にもちうるきぬ紙

たまむすびするにはきこわぐしてるほどのなどあるまでかな

活なぎれバこれ活詞のあやくにまふれハまうく ふまくを

ふこそを延ていひむまくハむすぞれるを約ていふるなり用ふ

此を 加 行下二段の活の事としてわ

麻行之圖 并受るてにをはの図

四段の活	一段の活	中二段活	下二段活
住(スム) 讀(ヨム)	見(ミル)	恨(ウラムル) 試(ココロムル)	褁(カラムル) 責(セムル)
(ま) ず で じ ぬ ん まし	(み) ず で じ ぬ ん まし て つ けん つる し て き なバ ぬる もの	(み) ず で じ ぬ ん まし て つ けん つる し て き なバ ぬる もの	(め) ず で じ ぬ ん まし て つ けん つる し て き なバ ぬる もの
(み) て つ けん つる し て き なバ ぬる もの			
(む) めり らん べき らし と とも かな まで に を より	(みる) めり らん べき らし と とも かな まで に を より	(む) めり らん べき らし と とも	(む) めり らん べき らし と とも
		(むる) かな まで に を より	(むる) かな まで に を より
(め) ぞ ぞ ども	(みれ) ぞ ぞ ども	(むれ) ぞ ぞ ども	(むれ) ぞ ぞ ども

四段の活詞

あむ　あのむ　あからむ　○あきむ
○あつらむ　あいまむ　あやしむ　あやぶむ
あゆむ　あきらむ　いむ　いのしむ
いきらむ　いそしむ　いらむ　いつくしむ
いがむ　いとなむ　いやしむ　○いだむ
うむ　うむ　うづむ　うたゝしむ
うとむ　○うぐめむ　うまうしむ　うらやむ
○うはらしむ　うれしむ　○おいぞむ　おもりむ
かむ　○かむ　○かいまなむ　かゞむ

かくむ　かしこむ　かきそむ　○かゞむ
○かじけるむ　かはしむ　○きばむ　きざむ
くむ　くむ　くゝむ　くやむ
くるしむ　○くろむ　きしきざむ　こむ
○ことなむ　このむ　さいなむ　しむ
しがらむ　○しづかむ　しづむ　○しだむ
○しぶしむ　しらむ　○しころむ　○しらむ
すむ　すゝむ　すくむ　すさむ
すくむ　すゞむ　そむ　そねむ
○たむ　たくむ　たしなむ　たゝむ

たのむ　たのしむ　たゆむ　たらむ
ちぐむ　はむ　はさむ　はかむ
はしむ　○はぶむ　ひそむ　○ひそしむ
ひくのむ　なぐさむ　なごむ　なごむ
なくさむ　なやむ　なまめむ　○ふかむ
ふくむ　○ふぐむ　○ふくむ　ふさむ
ぬすむ　ぬるむ　そくむ　のむ
のむ　かゞむ　ちむ　そくむ
○そゝりしむ　そげむ　ちさむ　そらむ
きがむ　ゑそむ　○ゑるむ　ふむ

ふくむ　○ふくらむ　かとかゞむ　ものどらむ
○ふつらむ　むしだむ　うむ　やむ
やむ　○やすらむ　○やさかむ　やすらむ
ゆのむ　ゆるむ　よむ　よどむ
○よくむ　あむ　きつむ　あしむ
きらがむ

○何ぞむといふこと拝あるへしさむらふ此法なるあ
○あさむ　源氏若菜にふみてあさみ　うへにお語後藤に天
下の人いひあさみて　狭衣にあさみはらだゝなに　浜松中納言
おぼえにおどろきあさむむなどあり

○あへらむ　万葉二に敵見有（アダミタル）とあり此外に活きたるうたあるべく
ばかりもそれ活ある事なし中二段の活のうたあらじ、
○いそらむ　日本紀神武巻也聚居之（屯聚居此云怡波瀰萎）又欽明巻ニ
充満（イハメリ）なども あり
○うべなむ　続日本紀宣命に天地乃宇倍奈弥由流之天とある
のこれりこゝに活なる詞し
○うるはしむ　伊勢物語にわがせしがごとうるはしみせよと
ありこれも上にいへるがごとし
○おいらむ　枕草紙においらぐとあり
○かむ　和名鈔に擤俗云波奈加無　源氏総角巻にうちかみ給へば

しぞうちかへてなげきあり
○かいまむ　いせ物語にかいまみてけり　大和物語かいまみに
かいまみえそ見けり
○かゞむ　霊異記に竄を可陀弥（カヾミ）　日本紀又続日本紀宣命ニ
竄（カヾム）とあり
○かたじけなむ　続日本紀宣命に辱弥（カタジケナミ）とあり
○きばむ　好忠集に秋ちかくきばむ松の葉にまじれる
○くらむ　狭衣にくらされわたりとあり
○くやしむ　古今集にくやしなむともかひあるまじあらなくにや
又源氏物語にくやしみなみにおぼしける

○しづかむ　源氏行幸にはかなきさましげにしつらひとまさ
なくしづかみたる　枕草紙にしづかみたる髪になどあり
○しぶむ　万葉十八に之保美かれゆく
○しぶじむ　源氏明石にうちしぶじむをなりて又蒼やかに
しぶじみたまへるしかれで又夕顔にしぶじみ云く　浜松中納
言物語にこれかれしぶしぶみたる人をなだらかにとり
○しなむ　枕草紙にいとしうしなみかれてとあり
○しわむ　万葉九に日かゝりしはぶくも皺奴　字鏡に酢を
於毛氏志和牟などあり
○たむ　万葉三におきつしまこぎたむ榜回舟八きよくむこのうらを

榜転小舟又十六にやらのさき紀多未足てきたくとなどありて
捨さおる名にしたみてゆきのもいかにあるまあなし
伊勢ものがたりはて桜の中二股にも法をて用しそ所り
○ちぶむ　今撰和歌集に為真入道こ枝に抑ぶむを花なり
ゆめぢにぶむとある歌
○ひくぼむ　万葉集十七にはふこもちぶかなもと等毛之美し
などいう形ありなり
○ふかむ　源氏物語帚木にふかみたる　掖衣にふかみかゝり
などもいへり
○にごむ　日本紀崇神巻に和享とあり

○ふゞむ　源氏葵にふゞめるはぞ　栄花物かたり露拭に
みなふゞみたり
○ちゞかむ　続日本紀宣命に愧美(ハヂミ)とあり
○ひるむ　和名鈔に痿痺俗云比留無夜末比(ヒルムヤマヒ)此活詞と見ゆ
○ふくらむ　源氏物語紅葉賀にうちふくだみたまへるび
んぐきなど見にあり
○うつぶむ　源氏夕貌にみつぶみてまどひ給ふなり
後撰集雑にちゞ川のみつわくむまておいにけるなどあり
○やくさむ　古事記上巻に吾御子うち不平(ヤクサミ)ましまし
日本紀神代巻に擧體不平(ヤクサミヨフ)などあり

○やさかむ　古事記下巻に瘦萎(ヤサカミカレケテ)とあり
○よゝむ　万葉集四に老舌出て與余牟(ヨヨム)ともあり此
活のさま見えり
○なみ居　なみ立るなどいふをなへびなてゝ此活詞なし
あらし又万葉七にこぼゝしの夜のかげに将比疑(ナミムカ)とあれば此
行中二段の活きはたらかで志り活く詞のさまにあらざれ
ばこれは誤かとなるべし

一段の活詞

○みる　見

中二段の活詞

此むるを俗にはそみるといへり

○ゐむる　俗　○うらむる　○とむる　こらむる

こゝろむる　○たむる

○あむる　古今集に都へしゆあらんとてこゝく　枕草紙了

ねおきてゐむる湯をこゝくなど自示ゐり

○こゝろむる　狭衣にうしろむる人なのゝらんよあハとあ

をうしろみといへるもおなじ

○うゆむる　源氏竹川にきこしうとゆむると云り此て此

詞此四段にも波行の中二段にも活きて皆同しこれも

○たむる　万葉六にこゝを多武流とかへぐし　又二十ホ

をかれきき伊多弁流となどゐり大の外たらんたらぐ

たらじ　ためん　ためぞ　ためじ　などゐきたるをかんざ

まぞこれ活きの此下二段の活らいづれともたしかにさだめん

かくれどもこの方によるべし

下二段の活詞

此むるを俗言にはえるといへり

あのむる　あがむる　あきらむる　あこむる

あきらむる　あたむる　○あやむる　あらむる

いさむる　いよしむる　うのむる　うだむる

○えらしむる　○おとしむる　かゞむる　かほむる

かゝむる ○かゝむる かゝむる ○きゝむる
きよむる きよむる くるしむる くむる
はむる はげむる しむる しむる
○しゞむる しゞむる ○しづむる しづむる
○しめむる すゝむる せむる ○せゝむる
そむる ○そゞむる ○たふとむる ○たむる
たむる たしなむる たのむる ○たゆむる
たゞむる ちゞむる つとむる つむる
つゞむる つゞむる つゞむる ○つゞしむる
つよむる なむる なかむる なぐさむる

なごむる なごむる のどむる ○をむる
ちゞむる ちしこまむる ちゞまむる ○ゑむる
ゑがむる ゑそむる ゑろむる ○ふのむる
をむる ○みしむる やむる やすむる
ゆがむる きよむる

○何しむるといふ詞おほし皆この活なり
○あやむる 堀川百首よミ人しらずかはらぬ神も人ぞあやむる
散木寄歌集に逢ふともなのめしき人にかゝりこしハいまぬ人ハ
はやめましや八 濱松中納言物語にまめあいれてまかせてしを
あやしあやめて人つまに語らへりけるなめかなとあり

○えしむる　万葉二十にえらひに依志米しとあり
○おとしむる　源氏桐壺におとしめそねみ給ふ杯あり
○からむる　伊勢物語にからめられたり　落窪物語に
からむるやうになどあり
○きたむる　続日本紀宣命に支多米たまふべく　日本紀皇極
巻歌にいはのかみにこさるこめやくと岐多麻須母とありけまたきためそむ
の延たる也
○しづむる　源氏行幸にもてしづめたまひて浮舟にこゝろしづめ
きしづめかしこまりてなどいへり
○しづむる　拾遺集雑にしづめしといふもあり

○しなむる　日本紀崇神巻に匿をしなめてとよめり
○せばむる　狭衣にかのかたをとりはなちせばめにせばめ云く
又母さまにせばめいでよみきこゆる所どもなどこそあれ
○そばむる　源氏桐壺にあいなくめをそばめつゝ　又竹川
にそばめられとなり
○たふとむる　新古今集序に尊をたふとぶるなりけりとは
まことのぶるはむるといふにおなじ
○たむる　六帖に真弓ためがたくあり　後拾遺集雑に君に
こゝろひためつる云く　又八幡に弓をためるそのねなり
○たゆむる　源氏紅葉賀にたゆみたまふこともあり

○ともしむる　万葉十八に今ぞしる乏年（トモシム）べしや又十一に目莫令乏（メナトモシメソ）

○なむる　万葉十七によろち波米底（バメテ）とあり又いせ物語にきこえてはあなでとあるもあはれとすせの給へるはれども六帖し詞し

○しむる　源氏澹合にいみしくしめてとありこれ活きたる

○ふかむる　万葉二に深目手（フカメテ）とあれど古今集に何にふかめておもひそめけんなどあり

○見しむる　万葉十七に見之米（ミシメ）とあり

○蜻蛉日記にけれバそいのちも活くしむれとあるを証しめの延ハかるるまでこれ活詞のあるべしと上りのもいへり

也行之圖　并受るてにをはの図

中二段活　下二段活

老（オユル）報（ムクユル）	愈（イユル）榮（サカユル）
い	え
ず で じ ぬ ん まし	ず で じ ぬ ん まし
て けり けん つる し	て けり けん つる し
て き なべし ぬる ちち	て き なべし ぬる しの
ゆ	ゆ
なり らん べき らし やも とも	なり らん べき らし やも とも
ゆる（イ）	ゆる（エ）
かな まで に を よあ	かな まで に を よあ
ゆれ	ゆれ
ぞ や ども	ぞ や ども

○此行にをき四段の活一段の活なし

中二段の活詞

此ゆるを俗言にをいるといふ例あり

○おゆる　くゆる　○こゆる　○むくゆる

○おゆる　源氏手習に年のおゆるまゝにそとあり

○こゆる　万葉五にこち許伊ふしてなど既にあるにも
こゆ　こゆる　こゆれなど活きたる所あるべくはあれどもかく活く
詞の例なし　又こゆ　こゆる　こゆれと活きて阿行の詞とも
おもはるれど　こやる　こやりなどやゆよの行よりかよひて
たちけれど此行の詞なることあきらけし
○むくゆる　うつほ物語俊蔭にもむくいんとよめり

下二段の活詞

此ゆるを俗言にはえるといふ例なり

○あゆる　○あゆる　○あゆる　○あまゆる
いゆる　○いえゆる　○おびゆる　おぼゆる
おもはゆる　きゆる　○こゆる
こゆる　こゆる　さゆる　さゆる
○きなゆる　そびゆる　たゆる　○ほびゆる
○もゆる　○むゆる　○たゆる　まみゆる
みゆる　きゆる　○ひのゆる　○をゆる

○あゆる　うつほ物語菊びらきに松風ふきはじめる窓もえそしか月うつれる子のあえものにせむかくし松風とあゆ
とやきれる君の子のおやの年をよろづの世にとこそきく後撰集
よしみの代々経るものにあめにあえてきけね　金葉集連歌に
なかく阿ゆるをあゆといふらんなどあり

○あゆる　万葉八に玉にぬく五月をちかみ安要奴がに
花咲にけりと云ひ又十に秋萩をちらすな名の花の阿要奴がに
云ひ又十八に安由流実は玉にぬきつゝ云ふなどもあり
○あゆる　落窪に血あゆるばかり　枕草紙にあせあゆると
こちたくきこゆる所どもあり
○ほまゆる　源氏井川にあまえて寄生にほゝえみてまうて
葉花宴にもありの皆ありえてとのうちあやて前に活きまた
活とも見ゆれど言もあれば　波　行下二段の活らとも思へど俗言に
あまやかしといふ詞もあればなかなかにこれ活なるべし
○いでゆる　和名鈔に嘶　和名以波由　源氏総角にてるがもの

いでゆる後拾遺集に弱きいでゆるなど打ゑしけることぞ
と近き世にいでいふなど　波　行の四段の活にいへど
新古今集にもいへるいゝるべし
○おびゆる　万葉集二に協流まで源氏物語帚木に
やとおびゆれど若菜におびえさわぎてなどあり
○くゆる　万葉十四にみつ志のさまの伊波久叡乃君が久由べき
○志なゆる　万葉二に夏草の思ひ之奈要て云く十又十九に
之奈要ちぶれなどありけて此詞のを　波　行の四段のもや
きこまへの所にいくるを活めらしきるべし
○ひゆる　字鏡に瘠　豆比由とあり

○しゆる　万葉二にかゝれぞ波由流とよめり
○ふゆる　拾遺集に冬ハひえにかゝるとあり
○たゆる　霊異記に嗅吠を保由と訓注あり
○ほゆる　出雲国造神賀詞に御若歔生（ミワカエマシ）　忠岑集にも称
萬の志だくをおもふほゆてふ忠見集に人のほゆる菊の
うへに赤染衛門家集にあるにほゆるなどがみえしあり
○もゆる　古事記中巻に御軍皆遠延而日本紀に萎瘨など
の字をもつよみたりはてかくに活きたるもとかへぐかれバ阿行なと
まじめしべれど日本紀にあるにやとやよりはあかげなで此行な
ふべきなりし

羅行之圖　并受るてにをはの図

四段の活	中二段活	下二段活
去（サル）　釣（ツル）	下（オル）　舊（フル）	枯（カル）　晴（ハル）
（ら）ず で じ ぬ ん まし	（り）ず で じ ぬ ん まし	（れ）ず で じ ぬ ん まし
（り）て つ たり き けん なば る ぬる し ちる	（り）て つ たり き けん なば る ぬる し ちる	（れ）て つ たり き けん なば る ぬる し ちる
（る）めり ん べき らし と とも	（る）めり ん べき らし と とも	（る）めり ん べき らし と とも
かな まで に を より	（る）り　かな まで に を より	（る）レ　かな まで に を より
（れ）ば ど ども	（るれ）ば ど ども	（るれ）ば ど ども

○此行にハ一段の活詞なし

四段の活詞

ある　あかる　あがる　あまる
○あばる　あざける　○あくる　○あつまる
あらそる　あなづる　○あなぐる　○あぶる
あせる　あさる　○あやかる　あしまる
いる　いる　いかる　いきどふる
○いぶる　いふる　いしえる　○いたのる
いらそる　いのる　いつはる　いろどる
うる　うけぞる　○うごなはる　○うずくまる
○うまそる　える　おる　○おぎのる

おくる　○おくまる　おこる　おごる
おこつる　○おそる　○おこなはる　おとる
○おかどる　○おもねる　かる　かる
かる　かへる　かゞふる　○かゞまる
かぎる　○かくる　かける　○かぎる
かざる　かしはる　かしこまる　かへる
かたぶける　かたよる　○かなぐる　かそる
かへる　かまどる　きる　きる
きまぐる　きしる　きこゆる　くる
くる　くる　くゞる　くゞまる

○くさる
くだる
くゆる
○こぞる
○こやる
さぐる
さかのる
しる
しぶる
○しまる

くずる
くそる
○くつがる
こゆらる
さる
さぶる
さとる
しまる
しくづる
しなへる

くつがへる
くじる
けづる
こほる
さかる
○さくざる
さへづる
しぼる
○しだる
○しをる

○くねる
くもる
こる
こもる
さかのぼる
さしまる
さやる
○しぐる
しきる
しる

○すぶる
すぐる
そしる
そまる
たぐる
たづさはる
たぐしる
ちぎる
○つゞしる
つもる

○すべる
すがる
○そゝる
たる
たまはる
たゞる
たまる
つる
つゞまる
つまる

○すへる
○せまる
○そゝくる
たくる
たる
たぎる
たもとほる
つくる
つのる
つらなる

○すさぶる
そる
そそる
たぎる
○たなのくる
たぎかる
ちる
つゞる
○つまる
てる

とゞる とゞこほる とゝなる とゞむる
とゞまる なる なる ○なぢさへる
なのる ○なぶる なやる なのける
にぎる にぶる ○にごる ○にぶる
ぬる ねる ○ねぶる ねむる
のる のる のる のこる
○のぼこる のぼまる のぞる のぼる
のぼる はる はいる はかる
はしる はじまる はてる ○はねる
はかる ○はびこる はふる はぶる

はやる ○ひる ひかる ○ひかる
ひめる ひらまる ふる ふる
○ふる ふける ふさがる ○へなる
ほる ほる ほこる ○ほそる
○ほとぼる ほとばしる ○ほころぶる ほふる
○まる まかる ○まくる まさる
まさぐる まさぶる まじはる まじらる
まつはる ○まもづる まはる まもる
まもる みぐる みのる ○むかる
むさぶる むつのる めぐる める

ゐる　　ゐる　　○ゐぶる　　ゐぶくる
ゐとまる　　やる　　やる　　○やすまる
やぶる　　やぶる　　○ゆる　　○ゆまる
ゆがる　　ゆさる　　よる　　よる
○よまる　　よこぶる　　よこまする　　よこまる
よせくる　　よはる　　わる　　わのる
わそくる　　○わくる　　わける　　○わづかまる
きる　　きる　　きる　　○きこくまる
○きざる　　きどる　　きそくる　　きくる
○此外あはれがる　からがる　うるしがる　うひしがるなどいくら

とぶひ多しきなくて此法なり
○右に挙ぐる詞の中に有居の二ツはくるしからず或はまへて
此法の第三の音くをつぶむる八図にまよはせる如く
切るゝ詞と続く詞とをかねられぞあるとあるともあるを
あるともといふべき格ある事此二ツの詞のことなりとも
きかとあるとも又ひ文切るゝ詞なれもありとありといは
例なり其外めりらんべきらしなどのてにをはもとらく
はそすべて事から形る事はなし
○あぎる　万葉五にしるす阿射里(アザリ)をれうひのみとど云く
○あらまる　常花物語露林にはらまるとせしとうひてと

なり此たぐひしきはよみなの業

○あなぐる 日本紀舒明巻に入畝傍山因以探山 欽明巻に考覈古今 又字鏡に覈阿奈久留 栄花物語らうくしれ別に常刀や瀧口やなどいふものどもよるゐるはふらし関をかゝ見などしていふらうてあり世にそおかたの肌らかやくいひはくふるもいやくゆくしなどはめ

○あぶる 字鏡に焚阿夫留 後撰集物名に衣あぶらん

○あやかる 拾遺集にはやりかやまさこくとあり

○いさる 万葉十五に伊射流火波とあり

○いつかる 万葉九に伊都我里まぜバとあり

○うくなはる 大祓詞に集侍 続日本紀に末為宇古那波礼留

○うずくまる 古事記下巻に庭まてめ宇受須麻理葺生とあり

○うまちる 日本紀允恭巻に蕃息 仁賢巻に殖 皇極巻に不蕃息などあり

○おぎのる 字鏡に賒於支乃利 土佐日記におぎのりわざをして所どあり

○おくまる 源氏若菜におくまりたる又橋姫におくまりて云く

○おそる 続日本紀宣命に懼理となり依て此詞中昔より八此下二段の活きのみいへるをたくさかく四段の活きのも用ひたり此例隠觸恋なぞあり

○おそかゝる　うつほ俊蔭に女のおそかゝるかげにたらく
○おそとる　万葉十六にふちの木にまとひ於保登禮流とあり
又源氏東屋におそとれたるとゆるは同し詞ときこえたれど
しるといふてのおそは字書四のまるまつり受けたる八此下二段の例にて
て活き異なれハ手習巻にもかくあり
○おそねる　日本紀神武巻に侮媚をおそねりとよめり
○かくる　古事記上巻哥にまき山に日が迦久良婆下巻にこやまに
賀久理　万葉十五にやそしまに我久里なども見えあり此詞を
上にいへる如く中昔よりハ此下二段の活にのみ用ひたり
○かげる　古事記下巻に御ゆふ日の日賀氣流美夜(ヒカケルミヤ)云々　祝詞に

もあり又新古今集夏にゆふたちの雲のかげろひてすゞしく
くもりもとよめるぞかげろひを延へたるなり
○かなぶる　源氏箒木にひきかなぶりあなどあり
○かまる　字鏡に鹹ハ伊比久佐札利(イヒクサレリ)とかまくたれ
○くねる　古今集序に女郎花の一時をくねるにも云々又
蜻蛉日記にまろうしをくねりてかきつけなどあり
○くらがる　竹取物語にせかひくらがりてとあり
○くゆる　榮花物語月宴に世こぞりてくゆれども折あり
○こやる　古事記中巻歌にはぎさら許夜流許夜理母(コヤルコヤリモ)と
よめり又古今集によこほりふせる佐夜の中山を奥義抄

にもあらぬかくやるとあるに同じ　わらはもしらくか
○はくだる　おちくぼ物語又被衣にもはくだりとあり
○しづまる　栄花物語玉飾にしづまるやうに云々
○しづむる　後拾遺集君にまかするもしづめつけるとあり
○しためる　古事記下巻哥にやふ士麻理斯麻理をとほしとあり
○しをる　伊勢物語に女をまちてまへらくとてくれしとある
まつくれなゐとあり又源氏乙女に濃きがうへにいとこきをもしをるべき
○しぶる　うつほ物語吹上下にえうしぶしぶかせる上又源氏
桐壺にえもいひしらずしぶかてなるがあり
○しつる　うつほ物語あて宮にもしつらで　源氏玉葛巻に

梟しかなくなどあり又万葉五にかまのは酒しも須々呂比て
ともりくり須々呂比はすゝろひなるべし
○すゝろふる　拾遺集恋にすゝろひなれど　堀河百首夏にすゝろふすたれるや
などかぶる云々同二郎百首にすゝろしたりめべしなどあり此
堀河百首稲の句を一本にすゝろふるとあるはてそ此下二
段の活きにはあらじ
○すたぢる　宇治拾遺物語のびあがりかゞまりて云々
すたぢりもぢりなみくるを出して一座をはじめ蘭
○せまる　後拾遺恋にせまりなる大学れとあり
○そゝる　万葉集十七に於曽々理かるさくらち山　神楽哥

にゆだねかなむに曽く利あげよなどいへるにて

○そゝくる おちくぼ物語にちからうちひそゝくるにて蜻蛉日記七にこゝにおはせむなどいひてそゝくりあるをどりの栄花物語楚王夢にそゝくりあふせしことを云々などいへり

○たゝなはる 万葉一に畳有(タヽナハル) 枕詞張の髪のうちしくなはめて被衣にもたゝなはりてなどあり

○ぬびえる 字鏡に醋は左加奈豆々志留とあるにより又源氏箒木にはたらきあらふ又万葉集五にかゝるこゝをも取都豆之呂比とも延ていへり

○ぬびえる 字鏡に腓は孚始非也豆波利乃登支 和名抄に擇食は豆波利 おちくぼ物語にいつしかとつはりゐば金葉九にちかくれにつはるとみえしかども取くなどあり

○なづさはる 神楽哥にみてぐらにならましものをすめ神のみてにとられてなづさはるべくとあり古本又拾遺集には結句をなづさはましをとぞあり さては波行の四段の活詞となるべし

○なぶる 万葉十五に人奈夫理のみこそあるらんとあり

○にじる 字鏡に蹢は不弥尓志留とみえたり

○にぶる 日本紀天智巻に鋭鈍(トイサキニブリ)力娼とあり

○ねぶる 字鏡に䑛は祢夫留とあり

○のぞこる 日本紀齊明巻に病自蠲消(ノゾコリヌ)とあ業

○はなるゝ 万葉二十の波奈利蘇乃はなれそなはりか
く四段にても活くとみえたれど中昔より以下
二段の活きのみのこれり
○はびくる 日本紀顕宗巻の被をはびこれり 又はびこられ
などともよめり
○ひる 和名抄の痢ハ久曽比理乃夜万比 又放屁ハ倍比流
○ひつる 拾遺集の松の緑のふりかゝる雪を 挟衣三に
白かねの波よせてひつる松の緑のみどりなれ云々 堀河百
首夏の五月雨まで日数ふるまでもわするべき大井の岸ハひつらん
ぞありけりなどあり

○ふる 万葉二十のはなちに布理 古事記下巻のふるふるそ
やかくは布禮などありはてかくこその活びのふれどもにへ
はそうくれ此活の格とられも中昔より八下二段の活のみ用
ひられ下二段の活りてハふるその活びそふるれといふが定りて
此まちあまりかなひやうしよく考へ辨ふべし
○へなる 万葉十の山川をなかの歟奈里氐など猶あり
○ほそる 栄花物語花山のおそらせ給ふとあるハ此の活ゆゑ
○ほどくる 日本紀顕宗巻の被をほどくられりとよめり
○ほびくる 万葉十八の雲保妣許里豆とあり
○まつる 古事記上巻の屎麻理ちらしき 万葉十六の屎遠麻礼

竹取物語にはびこりめれまかなけるふるさとにと云く
○まくる 枕草紙に袖かいまくりてとあり
○まなかがる 古事記上巻にたくさ麻那賀理となり
○むかる 万葉二十に敝牟加流ふねとよみたり
○もちゐる 宇治拾遺物語にのびあがりかゞまりてまなぶべき
かぎりもてちがへまどりちらしくと云事
○やすまる 続日本紀宣命に息安麻流倍伎又休息安麻利旦
○ゆする 住吉物語に土をうちゆすりけるとあり
○ゆりる 神樂歌に由須利あげよそへかなしびに就あり
○よまさる 源氏若紫によまさりがすそしましけるとなり

○ひらくる 日本紀神代哥におまさ手まかず鏡まで絵にみえ
がためにしいとて和素羅玥よのてふくくも 万葉二十に
和須良牟砥などゆりけてかく第一の書らよみ志むのてにをを
はをも受る八図のめく四段の活又かぎりたり此詞も中昔より下
二段の活きれのみいへり古事記に八妹八王紀れし世のごとく
なとなりかくして下二段の活なり
○ひらかまる 枕草紙にわらのまりとなり
○ほうける 日本紀に誘聚 源氏若菜にほうけらるらむ
の心にて濱松中納言物語にほうけずなどありされて伐佃中の六
日本紀にひらくるとも訓されたるにいはれし

○ちはやぶる　日本紀神武巻に望見又睨などよみたりおせを空め
かゞらし皆日本紀の仮字法けりなよみてこゝに出せり
○万葉十三にしきちる花の末枝乎須具里又十四にをはぎねらはめ
十呂に羽具久毛流又宣命に起しきまりなどなるは皆ぎねらひ
たくむ法にちゞみを延たるのにこて此活詞のみあらはしことた
万葉十三の歌にもし寺にかも出ちりそこにをそ橋のたつえを過而
とあり此例上にかられたるあり其處くにいへるが如し
○まだ法て四段の活の第四の書よりさならん　さらか　さなる
さられ　おもはらん　おもくらん　おもへる　おもくれ　くるらん　くさり
しるてる　しるてまなどとうりるれとうけくる、全くこれ活き

ざる形り活まで活詞にかゝりくるてにをはの法もやゝあるなれ
ぼこゝの活詞の列にあらはしたれば此ふし上巻のはしにかんにありく
わきてこれをも万葉に咲有立有思有などのある字をとそへて
かゝれてこれ此意なればそのうくるてにをはをもよくいへるぬ
くなかとありともゆくいふふかしに

中二段の活詞

此るゝを俗言にはひるといふ例なり
おくる　こくる　○ふくる　ゆくる
○ふるゝ　古今集恋にふるゝふるればおもほえめし　後撰集
雑にふるゝ身はなきこの井にも云く　蜻蛉日記に二人の法心のうち

ふかくかなしけれどもあり

下二段の活詞

此〳〵を俗にまへるといふ例なり

あくる〳〵　○あぐる〳〵　あきらむる〳〵　あくがるる〳〵

○あざるる〳〵　あざるる〳〵　あふるる〳〵　あらはるる〳〵

いるる〳〵　いとまるる〳〵　いらるる〳〵　うかるる〳〵

うくる〳〵　うづもるる〳〵　うまるる〳〵　うもるる〳〵

おつるる〳〵　おくるる〳〵　おそるる〳〵　おさはるる〳〵

おとづるる〳〵　○おぼるる〳〵　おぼるる〳〵　○おもとるる〳〵

おびゆる〳〵　おもはるる〳〵　かるる〳〵　かくるる〳〵

○かぐる〳〵　○かぶる〳〵　かぞふる〳〵　きゆる〳〵

きこゆる〳〵　くる〳〵　○くる〳〵　くづる〳〵

くづをるる〳〵　けおさるる〳〵　けづる〳〵　けゆる〳〵

げぢるる〳〵　こがるる〳〵　こぼるる〳〵　さくる〳〵

ささふる〳〵　すつる〳〵　すぐる〳〵　さする〳〵

○志づむる〳〵　志のぶる〳〵　志をる〳〵　志ぐる〳〵

志らぶる〳〵　すすむる〳〵　すかるる〳〵　すくる〳〵

○すずみやかる〳〵　せかるる〳〵　○そぶる〳〵　○そむる〳〵

〳〵つる〳〵　○たゆる〳〵　○たゆる〳〵　たぐる〳〵

たるる〳〵　たふるる〳〵　たふる〳〵　たゆる〳〵

はづるゝ　はぶるゝ　なるゝ　ながるゝ
なのめらるゝ　まくらるゝ　ぬるゝ　ぬらるゝ
のがるゝ　ちるゝ　ちぎるゝ　それるゝ
○ちぶるゝ　ひつるゝ　ひるゝ　あかるゝ
あくるゝ　ほるゝ　まぎるゝ　まつるゝ
まどはるゝ　まぬかるゝ　○まみるゝ　こぼるゝ
○むるゝ　むつるゝ　むなだるゝ　むまそだるゝ
みだるゝ　みまかるゝ　みなだるゝ　もるゝ
もとまさるゝ　○やるゝ　やはるゝ　やぶるゝ
ゆるさるゝ　よるゝ　よろるゝ　ほるゝ

わするゝ　わかるゝ　わかるゝ　○わづらはるゝ
をさるゝ　をしるゝ

○右に挙たる外四段の活詞の其第一の音よりおぼゆるゝと
おぼえらるゝくらるゝをとうらるゝくむをくまるゝ行ど
活らし又一段の活詞中二段の活詞の其第二の音よりきるゝを着
きらるゝはゝ見るゝを見らるゝおくるゝをおきらるゝはふるゝを
こひらるゝなと活らし下二段の活詞のその第四の音よりあ
うくるゝをうけらるゝいづるゝいでらるゝながむるゝを
ながめらはゝわどるゝらるゝと活らしるゝたぐひなれいと
多しこれらしくるをおさゞみなこれ此活詞なり

○あかるし　源氏物語帚木にあかゝるしみえて　空蝉巻に
あかるしげなる所どもなどあり
○あざるし　字鏡に鯘は魚肉爛也阿佐礼太利とあり
○おびるし　物語文どもにおびれなどいへるはかゝる所にて本には活き
ふるまひあたらしうたれども此活きなる詞し
○おほどるし　源氏東屋におほどれたる云々又手習に髪のすそ
その儀におほどれたる所どもあり
○かぐるし　万葉九に舟こぐ所よりかゝ香具禮といへるなどに
みえばれども此活詞なるべし
○かぶるし　和名抄に漆瘡は和名宇流之加不禮といへり

○くるし　神楽哥に山人のあれにくれたるやまかづらこそま
狭物語書などにはくられたり
○しほるし　散木奇歌集に雪をおもみしをれるみちのえ
だなれまではそる小笠にしづれおつ所同長哥にくづるゝみ
なりをも白ゆきの雪はしをれまさりけれ　丹後守為忠家
百首に仲正雪まじる松の下葉の雪をうち払ひ日かげまさりし
こずえしぼれもふれるなどあり又綺語抄におく山の乃
しづり雪しづくのそでなれやあさひのかげにぬれぬとおもへど
四条大納言の枕にあかつきの雪のおちたるをしづりといふ所と
ありこれも同し詞ときこえたるをしづりとて四段の活

はなれりかくも活く例のやからのなんあらざれば
○まみやかるゝ 詞花集恋に いつしかのとまくみやかれ活し
とあり 速に炭焼をかけたり
○そゝるゝ 夫木集雑の部にそゝれぬまでそよぎえたり
○そばるゝ 狭衣一に わらひそばるゝけそひとつめまつく
今撰和哥集に為真入道うぐひすの梅の花がさちめぬれ
ぞふるまちかねてそばれてさび明くとまれよあり
○くゞるゝ 古事紀上巻に宇士多加礼と有り俗言に八ぐらめ
と四段の活例はいくり
○しぐるゝ 古事記上巻に血㶇をちあえしぐれたりとあり

○たふるゝ 源氏夕顔にはふれぬ陰もとあり
○まみるゝ 日本紀神代巻に血塗をまみれたり此よみあり
千載集にまみれてまてなどあり
○むるゝ 丹後守為忠家百首に為威しくさゝてみるちむるゝ
くらかれたありむれと八つねにむくいへり
○やるゝ 神楽歌に袖ふりやまあるらし
○ころびるゝ 物語書にころびれといへるのみにて外に活き
くれたるあらざれども此活きなるべし

和行之圖　并受るてにをはの図

一段の活

中二段活

下二段活

植(ウヱル)　飢(ウヱル)	率(ヒキヰル)	居(ヰル)
ゑ ぞでじぬんまし てうけんるし てきなばぬるぢ	ゐ ぞでじぬんまし てうけんるし てきなばぬるぢ	ゐ ぞでじぬんまし てうけんるし てきなばぬるぢ
う めりらんべきらしととも	う めりらんべきらしととも	ゐる めりらんべきらしととも かなまでにをより
うる かなまでにをより	うる かなまでにをより	
うれ ぞばども	うれ ぞばども	ゐれ ぞばども

○此行にて四段の活詞無し

一段の活詞

ゐる
居

○和名抄に艘ハ俗云爲流船著沙不行也又齗ハ此間云波井流齒
傷酢也などみゆるハ同き詞にて又同じからで異なる文字を羅行の四
段の活詞にて　ゐらん　ゐり　ゐる　ゐれ　と活く詞のかよ活きて
はた見ゆれバまぜいづれとも定めがたし

中二段の活詞

此うるを俗言にハ　ゐるといふ例なり

○うる

○ひきうる

○もちうる

○うる物語書などにかへてあるなどいへることしられなかりけり

うゝる うれなど活らるゝをもくずれどもその活と見えるゝ活て
これをひきゝるの言ゝるを略きたる詞とおもふ人もありしがくあり
言きゝる八此詞よひぬけといふことをかきそへていへるなるめ
○はきゝる 日本紀崇神巻に急居此云二菟岐于一とあり物語文
に詞ゝはかなふ所どもいへるをも多くしあるなし詞し

下二段の活詞

此うゝるを俗言には急るといふ俗なり

○うゝる 飢 ○うゝる 植 ○くゝる 蹴 ○きゝる 居

○ひゝる

○うゝる 字鏡に饑ハイヒニウ。伊比尓宇ゑとあり飢ゑとりいへる多し

○うゝる 伊勢物語に志をうゑたきくものなくバ終ぞ多し

○くゝる 古事記上巻に蹶散（クヱハララカシ）又蹶離（クヱハナチ） 日本紀に蹴散此云二俱穢簸邏々箇須一などありけて和名抄に蹴鞠世間云末利古由とあり同し詞なるをかくいひてそ也行の下二段の活なりて仮かも異なり此ら語をやく語めるなるや

○すゝる 拾衡集にいくなれど大内山のそらすゑく今ハ肌てこの関など法ゝらんとあり又すゑとへる八多し

○ひゝる 古事記中巻にこきゝ斐文恵泥（ヒヱネ）とあり此詞が活きたるとあらんずれども第四の音によ祢とうゑるハ下二段の活の定まりなきて和名抄に竹刀ハ阿乎比衣とありてホハひと

つゝかのうちわかるゝと思へるゝに假字のちがひまゝるそゝるかく

よ雲ことなるらんや

[安]行よりはじめて右に挙ぐる詞ども猶さまざまに法きてかぎりあり

能くおもひわかれども思ひ出つるに志てのこし知るなれども

もて見るなる多かるべし是をいふにならひてよまるゝはきりあり

文化三年春三月

詞はなら出ていふことな。歌よむにも。文かくにも。法みに書見る毎に。ふかくんとく見そ。志ていふべき事は。志ろいふへおりけりや。よくこゝろえつは人も。まなふへ志ぬ毎あらさるへけきと。おほろけに見てちくし。或ハまゐ

わろく世にしられぬ人は。何くれのことよみ
いて。かゝ海にしるへ思ひもむにさし。なりわ
てハ。思ひもまとひ。文も何事なくもてわ
つらふることも。安へのすみれハ事て。春庭。
此ひとつ翁ふみとせ。これうまの書とも。
人にあきらかせなとするついて示。これう

しるへ事。引いつへき詞とも。はみいておほ
きかるうへに。猶よく考へ正して。おき八。
そのはかり紀の事なれわれもこゝのわり
なとも。抑もひさしきてうれ。詞よみふみ
かく人は。世やうくさかまつへて物し
世るわれ。猶ひきもうし。かむろへおよ

はぬもあらむを。此やちまたみちしく
にならべて。わきまへてよかし。

本居大平

静嘉堂文庫

文化五年戊辰之春發行

製本弘所　書林

江戸白銀町二丁目
須原屋善五郎

大坂心齋橋筋唐物町
河内屋太助

勢州松坂日野町
柏屋兵助

京都三條通御馬場東入町
錢屋利兵衛

同　御幸町通御池下ル町
菱屋孫兵衛